

昭和二十四年七月十五日發行第三(每月一回郵・十五日發行認)可

(通第三〇号)

慈光

第二十卷

第七号

次
 彌陀悲嚴母父の引抑止……………近角常観……………(1)

蕩児と翳子①……………福島政雄……………(8)

希望と光明……………麻生介……………(13)

目
 無題録……………大野静哲……………(17)

歎異鈔第一章②……………花田正夫……………(19)

慈光

釈迦嚴父の抑止 弥陀悲母の引接

近角常觀

大經五惡段の説法

先達て落慶式（求道会館落成の際）後は、朝夕仏前で、『讚仏偈』を読ましてもらうを御縁として、その偈文（げもん）をよりどころとしてお話しておる。『讚仏偈』は、諸仏菩薩が阿弥陀仏の浄土に詣うでて讚歎し給う偈（げ）であれば、それ程に阿弥陀仏の本願が一切諸仏に超え勝れ給うというは何処であるか、これが第一の問題であります。今その意味を手短に申せば、一切諸仏の教えは「諸悪は作す莫れ衆善は奉行すべし」である。あらゆる善はこれを修し、あらゆる悪はこれを廢し、自らその心を浄うして仏の境界にいたる、との教えである。まことに結構な尊い教えであるが、如何にせん私共實際において、真面目にそのように行わんとしても行うことが出来ぬ。

こは、この浄土教の上でも、この大經なる經は、ある訳では「過度人道經」の名があるほどで、全体私共が真面目に守るべき人道を説き給うた經である。中でも下巻には彼

の名高い五惡段があつて、五惡をいましめ、五善をすすめるとお説きなされてある、この五惡段の所など、これを読むと、およそ一言一句として私共の心に当らぬという箇所はない。残らず私共が日常生活に於ける浅ましい処をお書きなされてある。一二箇所を挙げて見ると、

其一惡とは、諸天人民及び虫けらの類にいたるまで、すべてもろもろの惡をしようとしている。強い者は弱いものを征伏し、互に殺しあい傷つけあい、呑みあいかみ合つて善を修めることを知らず、惡逆無道である、云云。

其二惡とは、世間の人々は、親子兄弟夫婦一家、すべて義理をわきまえず、国法にしたがわず、ただおごり、たかぶり、わがまま、みだらで、各々自分を満足しようとして気ままを働き、互にあざむきまどわし、心と口とことなり、またまことがない。上の者にへつらい、言葉たくみにこび同僚の間で賢いとねたみ、善人をそしって無実の罪におとしいる。上の者に目がなくて下を任用すると、その不明

をよいこととして勝手なことをして偽って悪事を重ねる。

其三悪とは、世間の人々は互に相より相たすけて共に天地の間に住んで居るが、この世に居る寿命はいかほどでもない。上に賢明なもの、長者や富豪や尊貴なものが居れば下には貧しいもの、賤しいもの、低能なもの、愚かものも居る。そうした中に善くない人が居て、常に邪悪な心もち、ただみだらなことばかりを願うて煩悶のたえ間もなく愛欲に心乱れて、起つても坐してもそわそわしている。また貪欲で財産をおしんで、ぬれ手で粟を掴もうとしている。美しい女に心うばわれて、外目もかまわずふざけちらし、自分の妻を憎んでひそかに他の女のもとに出入りし、かくて家財をつかいはたして、ついには法を犯すにいたる云々
其四悪とは、世の人々は善を修めようとは思わず、互に見習い合うて色々の悪事を働く。二枚舌、悪口、うそつき、へつらい、或は人をおとしめ、あらそいをおこし、善人をにくみ、賢者をきずつけて、それを傍観して喜ぶ。また両親に孝養を尽くさず、師や先輩を軽んじ、朋友に信義をまもらず、何事にも誠実を欠いている。自分が尊貴の地位にあれば尊大にかまえて自分ばかりが道にかなっていると思ひ、無暗に威勢をはって人をあなどっている云々。

其五悪とは、世の人々が、心おちつかずなまけていて、一向に善をしようとせず、身を修めず、家業をおこたるた

「唯、五逆と正法を誹謗するをば除く」

と、取除けが附加せられてある。全体本願においてことごとく救うとあるに、かく取除けが設けられたというは、こは釈迦の抑止（おくし）と申して、釈尊が私共を誡めて下されたお言葉である。この誡めの御一言が下巻になって五悪段の説法となり、世間の人民等これこれの悪事があるとひしひし私共の心中をおさえてお説きなされた訳である。故に五悪段を読むと、一言一句が私共日々の行いに的中する。

こは現に私が煩悶した時に、この五悪段の文を書いて苦しんだことがある。その時自分に当ると思う一句一句に点を打った、今もそれが残っております。苦しんだ時だからありがたい所へは一つも打っていない、悪い所へは打つてある。これが即ち唯除五逆誹謗正法とある抑止のお言葉にもとづくもので、釈迦嚴父のきびしい御誡めであります。

而して、その釈迦の御誡めなることは、即ち一切諸仏の教え給う、諸悪莫作、衆善奉行の教である。こは釈尊御一代の教にしても、飽くまで戒定慧の三学を守り、何処までも善をして行けという仰せの外にない。また三世十方過去七仏の教えも皆これになる。即ちこれから今の唯除五逆誹謗正法のお言葉も出てきたわけでありませう。

ところでこのお言葉は、実に厳しいお言葉である、如何

めに一家親族が飢えごえて困苦する。父母が意見をすれば目をいからして言葉あらく口ごたえをして、言うことに角がたち、さからいそむくことはあだかも敵同志のようである。親はこんな子ならむしろ無い方がましだと思ふ。また人から物を取るにも、与えるにも節度がないから、多くの人々がみな迷惑する。また恩にそむき、義理もふまず、受けた恩に報いる心も、借りたものを返す心もない。かくて貧困におちいつて、二度ともとのようになれず、ただ自分のためばかりを思つて、無道に他人のものを奪い取り、それを勝手にまきちらす。こんな悪事が習慣になつて、他から奪つた財宝で贅沢な生活をし、酒に耽り、美味をむさほつて無暗に飲み食いする。かようにわがまま三昧をしておごり遊ぶ、愚かなくせに出しゃばり、人と衝突する云々
かく私共の守るべき人道を説き給うたのが、五悪段の説法であります。

抑止の文と親鸞聖人

ところで五悪段にかくあるは何故かというに、御承知の如く「大経」には、第十八願に阿弥陀仏の本願を説かれ、「設（たと）い、我仏を得たらんに、十方衆生至心信樂して我國に生れんと欲して乃至十念せん若し生れずば正覺を取らじ」

と、かくことごとく救うと仰せられた後に

に阿弥陀仏の本願と言おうが、五逆の罪人と正法を誹謗する者は助からぬというはげしいお言葉である。

然るにここに気をつけねばならぬのは、親鸞聖人がこの十八願の文をお書きになつてゐるのを見るに、如何なる場合にもこの唯除五逆誹謗正法の文が落ちてゐるのがないことである。私は先日ある御宅に参りて内仏を拝んだ。法主台下の名号が懸けてあつて、名号の傍に矢張りこの御文が書いてあつた。私共によればこの御文はむしろ取つて置きたい程に思うのに、親鸞聖人は如何なる所にもこの御文をばぶいてお置きになることがない。本願をお書きになる所には、必ずこれを書いてお置きになる。

して見るとこれは恐らく、釈尊のこの世に來り、教え給う所はこの御一言にあるとの思召しであるうと頂かしてもらわれる。さすれば私共も釈尊の御教化はこの抑止の御一句であることをしつかり頂かして貰わねばならぬ。言い換えれば三世諸仏の御慈訓は、悪はしてならぬとの厳しき御誡めであるということである。

ところでここに遺憾ながら、何としてもその教えに随い得ない私共というものになつてくる。ここで問題が起つて來るのである。これから先が問題なのであります。

眞宗の人に抑止の意が徹底して無い

こは現に日本の思想界にしても、問題はこれ一つになつ

て居る。一方真面目なる思想よりは、飽くまで正しくせねばならぬと考えて、その通り実際に行うことに努力する。ところがその結果は反対に、むしろ滔々(とうとう)として行い難き方面にはしっているという状態である。これにおいてか初めて諸仏に超え勝れた弥陀の本願があることがあらわれ興って下さらなければならぬという筋合になる。

私は考えますに、全体従来真宗の人が、これまでに親鸞聖人が抑止のお言葉を重視してお出でになるにかかわらずどうもその意味が充分徹して無いようである。はじめからこれだけは不要視して、悪くもお助けと軽いことに取っておるから、釈尊の仰せられた意味合がさっぱり明らかになつていない。たまたま俗諦門をやかましく言う人は、釈尊の説かれた五悪段は俗諦故、「善をせんならぬのじゃ、善をせんならぬのじゃ」とそのまま自分にあてがって、そして「出来ぬからいかぬいかぬ」と泣いている。これでは一方に力説して下された弥陀の本願という味わいが全然消えておるから安心されようはずが無いのである。

さすれば今私共の頂くべき点は何処にあるか。何時も繰返す例の福島県のある物持の方の話である。息子がいらざる物を買ってきた。こんな物を買ってきたはしょうがないときびしく誠めて「買ったところへ返しに行け、然しそんなところへ行くのに汽車賃はやれぬから歩いて行け」そして

共を善くさせて行きたいが腹一杯である。私共としては何処までも戒定慧(かいじょうえ)三学を守っていかなければならぬが、釈迦の遺法、諸仏の通誠である。凡そ人として善く出来なくてもよいという法のあるべきはずがない。しかるに末法の時に於て、その守らんならぬことが、守り得ざる私共という者が出来てきた。ここにおいてその守り得ざる私なることをかねて知ろし召し、その者のために特別の思召しより現われ下されたが、唯一南無阿彌陀仏のお救いである。故に一方にこの真面目なる方面が無くては、本願の有難味は頂けないのである。現に私如きもこのお慈悲を知らせて貰うたというは、つまりこのせんならんことに力を失い、自分の立場に行き詰って、はじめて頂かせて貰うたのである。

「善くなり度い」と「悪くてもよい」と

そこで今日の道を求める方には両面がある。従来真宗の教えを聞きなれた側と、新に理想を持って立って行こうとする青年諸君の側と、この二つである。両方共にここはよく聴きとって頂かねばならぬ。

青年諸君にすると、真宗の教は何程罪惡の救済と聞かされても、元來の本意が出来るだけ善いことをしたいと在る故に仕度い／＼と、この点より言う時は、五善を求め五惡を避ける立場にある。ことに求道ということを表に出して

て母親に「歩いて行くのだから握飯を作ってやれ」と。子供は仕方がないので握飯を貰って泣く泣く出て行った。あとで母親を呼び寄せて「お前汽車賃をやったろう」「遣つては叱られると思つてやりませんでした」と言われると、計らんや「この馬鹿め、俺はああ言つたけれど、お前がやるだろうと思つて居たに」と叱られたという話である。

一方に汽車賃はやれぬと言われた嚴父の誠めは、非常に激しい。そこになると現に聖人は、御子様の善鸞さまが、お慈悲の真意にそむかれたために強く叱られた。そこは飽くまで厳しいが、それは是が非にも押しつけて其者を絶対にいかぬとある厳しさではないのである。その裏に、母に金を渡したかと聞く父の意は、その許すべからざる惡事であるが、それをした子供の身がいよいよ可哀想で、如何にしても捨て切れざる親心である。これが仏の本願のおこころであります。

全体従來の真宗の信者には、釈迦の抑止は方便である、あれは取り去りてよいのだという聞き方があって、折角涙のこもつた釈尊のお誠めをはじめから馬鹿にしてかかる風がある。「なに父はあんなに言うも、母はきつと金くれる」と、これで父のこころも母のこころも分らぬようになってる方が多いのである。

そもそも釈迦慈父のおこころにする時は、何処までも私

来る人のすべては皆これである。さて実際においてそれが出来てるかというに、一つとして本當に出来ぬのに皆泣いて居られるのである。私などもこれには実に血涙を絞つた。青年諸君の多くもそうであろう、この点には私は十二分の御同情を持つ。

すると一方聞きつけてる側の人は、頭から「そんなこと出来るものか、出来る位なら凡夫でない」と口先きだけはずくそう云う。では本當に安心出来るのかというに否、實際は「自分はこんなに善くしているのに、人が人が」と思っている。心の底では絶えず「自分はよくしている」否「せんならん」と思いつつ、聞く時だけ「悪くてもかまわぬのだ」という聴きようである。これは何処までいってもきまりのつくということがないから、余程よく気をつけなくてはならぬ。

なおこれが色々の形式をとって現われてくる。中には法を求め、安心を求めるために「もっと善くならんならん」という人がある。「もっと喜ばなければならぬ、もっと徹せねばならぬ」と。これは一應他の善事を行うために苦しむとは違い、信仰のためであるから、自力作善とは別様にあるけれど、これが矢張り同じである。

全体人間は妙なもので、筍の皮をむくように、同じことを何時までも繰り返す。はじめは世間的に善くしたいと考

えて、それではいかぬから次には理想的にと企てる。次に「それも宗教でなくてはいかぬ」いや「宗教は他力でなくては」「信仰を得なけりや」遂に最後には「頼み心がどうじゃ、後念がどうの」と、結局ちつとも善くしたいの心の外にないのである。昨日もある方が「自分は信仰は頂いているが、頂いた上の心持が聞きたい」と言われた。私は言下に「心得を聞かんならんようで頂いたと言えるか」と申上げた。人間は誰しもみな同じところで苦しんでいるのである。信仰問題に苦しんで「頂かんならぬ」と云わるるは、結局「よくせんならぬ」というと、すこしの違いもないのであります。そこでここになるともう人間は取るべき道がない。ここで行きつまる。どうにもこうにもしようがないことになってしまふ。

ところが、今の聞き慣れた側の人は、はじめから「人間がそんなに喜ぶことがあるものか、喜ぶぬままじゃ、悪いままじゃ、疑いのままおたすけじゃ」と、言葉におたすけを引つつけるだけで、その実安心にも何にもなっておらぬ。きつとこの二種類がある。これを現代的に云うと、即ち一つは修養風、一つは「しょうがないからあるがまま勝手にやれ」という流儀である。如何なる人でも必ずこのいづれかになりてある。

ことに私がこれをいうのは、今日世の中において、真面目な性分をかねてあわれと見て置いた、そのための親が特別の心配であるぞと、現われて下されたが実に弥陀の本願とすることでありませう。

故に「悪くてもよいのだ」であつてはならぬ。悪いためにかく詮方尽きはてているのである。一方に「そのような者故、一文も金はやらぬ、五十二段歩いて行け」と厳しき父の誠めを受け、最早たち上る力も失せ果ててゐる御同様なのである。

しかるにここに思いがけなく、大悲の母現われて「その汝の腑甲斐なきはかねて見て置いた。そのために母がかねて用意しておいたゆえ、これをやるから汽車に乗って行け」と、この腑甲斐なき奴をば飽くまでかばって下さる母のおこころである。一度この御心に接する時は、私が腑甲斐ないのがそんなにまで可哀相で御心を痛めて下されたのであつたか、ありがたいと、今まで真面目に行える気で居た者は、その長々の高慢の心を恥じ、悪くてもよいで腰掛けていた者は、その横着を心から畏れ入り、このお慈悲一つに腹底より満腹して、ここにはじめて人生を超絶させて頂けるのであります。

大正五年一月発行求道誌より。

目な青年が、努力奮闘し、しかもいくら努めても思うようにいかぬので、血涙を流して泣いている側の人がある。それらの方々に深く同情すると共に、一方真宗の人が「このままながらのおたすけ」と、これで自分では頂けた積りでいて、その実ちつとも頂けておらぬ。そのままとの処にじつとして居る。「岸上に登れぬ」と云いつつ、今日自分が沈んでいくことも知らずに居る真宗一流の人に、深く気をつけて貰いたいのである。

これは少しく気をつけて見られると、現在日本の社会も皆これになってある。一面に真面目に真面目にと、厳格な道徳主義、努力主義が盛んに唱えらるる半面に、それで何程やってみても、どうにもならぬところから、一方に悪いまま平気で押そうとの主義がしきりに行われて居る。而してこれが度々社会上の事実となつて現われ、両者ために苦しみを極めて居るといふ有様である。ついに何処を探しても阿弥陀仏の本願は影だにも見当らぬ。イヤ今日は真宗が盛んであると。なに宗教界と言わず、一般社会といわず、真宗など一つもありはしない。滔々として悪くてもよいといふ横着主義と、出来るだけよくやるうとの律法主義で行き詰つて居るといふ現状であります。

そこへもつてきて、今かく私共が、如何にしても真面目に行いきれず、正しくなり切れない、結局苦しむより外な

ぬしある家

徒然草

ぬしある家には、すずなる人、こころのままに入りくることなし。あるじなき所には、道行き人みだりに立ち入り、狐、ふくろうのようなものも、人げにせかれねば、所えがおにいりすみ、こだまなど云う、けしからぬかたちもあらわるなり。

又、鏡には色かたちなき故に、よろずのかけ来たりてうつる。鏡に色かたちあらましかば、うつらざらまし。

虚空よく物をいる。我等がこころに念々のほしきままに来りうかぶも、心というもののなきにやあらん。心にぬしあらましかば、胸のうちにそくばくのは入りきたらざらまし。

第二百二十九段

春の日の雪仏

徒然草

人間のいとなみあえるわざを見るに、春の日に雪仏を作りて、そのために金銀珠玉のかざりをいとなみ、堂を建てんとするに似たり。そのかまえをまちて、よく安置してんや。

人のいのちありと見るほども、下より消ゆる雪のごとくなるうちに、いとなみまつること甚だ多し。

第百六十六段

蕩児と窮子

福島政雄

今晩は蕩児（とうじ）と窮子（ぐうし）という題にして話させていただきます。これは御存じでもありません。キリスト教の方の新約聖書のルカ伝に出てくる譬であります。それから法華経の信解品に出ております譬であります。この二つをくらべて私の感じをお話申し上げようと思っております。

その前にすこしばかりキリスト教と仏教ということについて私の感じしておりますことを二三申し上げてみたいと思います。もう四十年前程前の話になりますけれど、ドイツに行っておりました時に私の郷里の熊本の先輩で鹿子木員信さんも丁度同じ時にドイツに行っておられました。その鹿子木さんに二度ばかりお叱りをうけたことがあります。一度は私が聖徳太子のことをしらべはじめましたのが四十七歳を三つ四つ越えた頃であります。丁度その時福岡にまゐりまして鹿子木さんと御一緒に夕食をいただきましたながら、その用事が済みますと法隆寺へお参りしたいと思ひます

が、法隆寺は実ははじめてお参りするのでありますと申し上げると、それだから日本の教育が駄目なんだとたちまちお叱りをうけました。というのは、日本の教育学といううなことを研究している一人の大事な人間でありながら、今日になってはじめて聖徳太子の法隆寺に参詣するというそれだから日本の教育は駄目なんだというお叱りをうけました。

ところが、その後もう一度お叱りをうけました。それは様子が違います。東京音頭というものを知っているかと云われまして、知りませんと申し上げると、それだから日本の教育は駄目だ、東京音頭のように、たちまちのうちに日本全国に伝わるものは何処か日本人の心にひびくものがある、それを知っていない、それだから日本の教育は駄目だとそんなお叱りを二度うけたのであります。

この鹿子木さんがドイツで、こういうことを云われまして。「建築というものは精神の現われである。だから西洋

に來たら西洋の代表的な建築をよく心して見るがよい」とそれからは、そういう心持で建築と申ししても西洋の寺院の建築であります。そのうちでも中世紀の代表的な建築でありますところのゴシック式の寺院をよく念入りに見て歩いたのであります。そうしますと感じましたことは、そのゴシック建築というものは皆天に向って憧れていると申しましょうか、天に向かっている、つまり人間の世を捨てて天国に向かうというああいう気持のゴシック式寺院に現れている。成程全体の姿を見ましても上へ上へと尖っております、それから窓が矢張り上に尖っております。中に入っておりますと、その柱の間の隙間（すきま）が上に尖っております。このゴシック式寺院というものは、飽くまでもこの世を見捨てて天国に憧れていくという精神をあらわしているなと感ずるようになりました。

そういう西洋の寺院を見てまいりましてから、京都とか奈良などに行きまして日本の寺院を見てみますとそこに非常に違いというものを感ずはじめましたと申しますのは京都に行つたたとえば東山の方を見ますと、塔でも寺院の建物でも京都の東山とすっきりと合っております。奈良に行つたあの大いなる大仏殿に行つて見ますとうしろの若草山とすっきりと合っております。

そうするとそこにキリスト教と仏教と大いなる違いがある

と感ずました。キリスト教は何処までもこの世の中を捨てて天国に憧れて行く。仏教はこの世の中と合っている。それは法隆寺に行つたあの大いなる塔を御覧になりました。あの大いなる塔を或方が、この五重の塔をじつと見ていると、空から舞いおりてきてここに落着いたように見える、この世をいやがって空に向かかって憧れて行くのとは違ふ、と、成程さうであります。そこに仏教の精神があらわれていて、仏教は御存じの通り一度は必ずこの世を見捨てると申しますか、この世を超越するところまで行きますが、ひるがえつてこの世の中にと合つて大事なことをやうて行く。そこところが違います。成程キリスト教の人もこの世で仲々働いている方が沢山ありますけれど、心持が、今のよう天国に憧れているという心持が根本にある。けれども仏教でも、お浄土は十万億仏土の西の方にあるというじやないか、そこに憧れるのじやないかとお疑いになるかも知れませんが、西方十万億仏土というのは、智慧第一の舍利仏に釈尊がお説きになったのであります。私共にはあんまり深いことは分りませんけれども、然しあれは智慧の眼をもつてただ考るといふとお浄土は西方十万億仏土であると云う。実はさうじやない、観無量壽経でおききになっておりますように阿弥陀仏は去ることを遠からず、と韋提希夫人に対して釈尊が仰言つています。そ

このところが矢張り根本に違い目があるのであります。この世の中にすっかり浸っていく、聖徳太子のお書きになりましたものを拝読いたしましたも、八地以上の菩薩になるという、一般の衆生の中にすっかりはいりこんで衆生とちっとも区別がつかないようなそういう有様になる。そこに八地以上の菩薩の非常な働きがあるというようなことを仰言っています。そういうところでどうも根本の心持がどうも違うように思います。

私は有名なセント・オーガスチンと日本の源信僧都をくらべあわしたことがあります。オーガスチンが自分のお母さんのおかげで信仰に入って、お母さんの御恩というものを非常に感じるのではありませんが、お母さんが亡くなったことを書いた懺悔録と申しましようか、あれを読んでお母さんのことを書いてあるところまで読んでみまうという、私共でも涙が出そうになります。けれども只お母さんというものをずうーと向うの神の栄光の御座に眺める、そしてお母さんの世界に憧れるというようなことがあるようであり

ます。
ところが源信僧都はどうか。僧都はお母さんが亡くなったのちに往生要集を書いておられますが、あれはお母さんのことがチツとも書いてありません。お母さんは何処にいらっしやる、お母さんはこの世を去って源信僧都のうしろ

ッテルになりますと、それは汝の敵が敵でなくなるまで、行け、とそうなっています。そうなりますと大分仏教に近しいというようになっておられます。

法華経の中の提婆達多品、そこには釈尊の敵だといわれてあつた提婆を、提婆達多は自分の善知識であるというのは、以前に山で修行して仙人に教えられたことがあるが、その仙人が今の提婆達多である。提婆は自分の善知識であるという有名なところがあります。そういうところに近くなったと申しますか、ルツテルの考えというものが仏教の精神に大分近くなっておられます。近くはなっておりますがキリスト教は矢張りキリスト教でありまして、どうしても違ふところがあります。根本の心持の違いがあります。こういうことを色々考えておられますのであります。

そういうことを前もって申上げておきまして、蕩児と窮子でありますが、ここに新約全書を持ってまいりましたが蕩児・放蕩息子のたとえを一応読んで見ます。

或人に二人の息子がいました。その弟の方が父に向って云います。お父さん財産のうちで私が貰うべき分を私に下さいと。それで父はその身代を二つに分けて兄と弟の二人に分けてやりました。

ところが弟の方であります、分けて貰った財産を集めて持って遠い国へ行ってしまう、そして真面目に働き

から広大無辺の光をもって照らしておいでになる。だからお母さんと仏様とが一つになつた、その光が自分をうしろから照らして下さる。その光の中に、地獄・餓鬼・畜生・修羅等という十の世界が見える。そこを往生要集には書いておいでになる。じやから源信僧都の場合には、亡くなつたお母さんと源信僧都とは一つになつていらつしやる。そこが違ふのであります。

一方はお母さんの行かれた世界に憧れている、一方はお母さんの仏光に照らされて十の世界というものを細かに描き出しておいでになる、そういうところに仏教とキリスト教との違い目があるということを感じますのであります。

それから親鸞聖人とマルチン・ルツテルをくらべてよく考えて見たことがあります。これは慈光誌の前に四回にわたつて出して頂きましたから読んで下さつた方もあるであります。非常によく似ているけれども違ふのであります。第一人間が、ルツテルという人は時々ひどいことを云つた人です、人を攻撃していますが、親鸞聖人はチツともそういうことはありません、非常に違います。非常に似ているところは、たとえばキリストは、汝の敵を愛せよと山上の垂訓に云つてあります。そこを私共の考えからしますと、敵だと思つたら愛することは出来ぬじやないか、と。そんなことを云つて見たくなるのであります。けれどもル

ません。そこで放蕩してさんさんに遊びくらしてその財産を散らしてしまいます。その財産を無くした頃その国では大きな飢饉がおこりました。そこでしようがないから、その或人のところに寄りすがつて、その畑の豚の番人をいたしました。ところが豚は食べ物を与えられていますが自分は食物を祿に与えられぬ、堪らぬようになりまして、その時になって子供が考えるのであります。自分のお父さんのところには食物が十分にある、自分は帰つてお父さんにこう言おう。私が悪うございました、私は天に対し、またあなたのまえに罪を犯しました、今からお父さんの子供だなど云えた柄ではございません、だからどうぞ雇人の一人のようにして使つて下さいと。そして家の方に近づきますと、そうすると父の方は子供が帰つて来る姿を遠くから見非常に喜ぶのであります。走つて行つてその子供の首に抱きついて喜びます。子供は父に対して、お父さん私は天に對してまたあなたの前に罪を犯しました、今からのちはあなたの子供に加えられることは出来ないと思ひます、とこう云います。ところが父親の方はただもう喜んで、サア急いでいい着物の方を持ってきてこれに着せてくれ、指には指環をはめ足には靴をはかせてやってくれ、そう云つて肥えた小牛を屠つて御馳走をせよ、この子と一緒にたのしもう、この子が死んだと思つていたのに生きて来た、なく

というのがあつた、これを或時、某僧侶に見せたところ
思ふことかないしときもしられけり

弥陀のちかひのふかきいわれは

と作りかえてくれましたが、私はそれに同感することが
出来なかつた。思ひがかなうた時は信仰が無くても誰でも
よろこぶのが凡情である。思ひがかなうた時よろこぶうら
には、一端かなわなかつた時は不足が出る。これは思ひの
かなわぬ不足を満たして下さる仏の慈悲に遇つていない
からである。

私が繰り返して言いたいのは、この思ひのかなわぬ消
極方面を何処までも見て下さる仏の本願である。故安波氏
(眼科医で胃痛で亡くなった篤信者)はここをハッキリ区
別して「吾々の希望の満たされる方面を仮りに積極的慈悲
と名づけ、どんなにしても希望の満たされない、喜べない
病気が仲々治らぬのを見て下さる方面を消極的慈悲」とい
われました、而して、

「病気が快くなつた。お蔭で喜べるようになったと、な
られたことのみ喜ぶのであつたら、その喜びは如何に大
であつても、いよいよの時、實際問題にぶつた時役
に立たぬ、こわれてしまふ」
と云われた。

信仰の上でもまた喜ぶようになったとか、念仏が称えら

然し、眞の救済ははじめこの消極的方面を説くために、
大抵の人が逃げ出してしまふ、それは消極から積極に及ぶ
ところまで聞きとおせないからである。然し仏の智慧の
光明によつて、いよいよ吾々に大なる消極方面があるとい
うことが知られると、そこを飽くまで見てくれる仏がある
かないか、それを聞いて信するか捨てるかで信仰問題はき
まりがつく。

私はいま大願の船に乗せられて仏の慈悲一つに満足させ
られた上からお話させていたのである、私が皆様と寸
分違わぬ不足をもつていて、それが健康や財産等で腹が満
たされたのでなく、仏のお慈悲一つに満足させられた上か
ら、その実際をお話し申上げてゐるのである。仏の御眞実
のあるだけ皆様の苦惱の中心点に向つてお話し申上げて
いる。

吾々は病気が快くなる方、財産が得られる方は喜ばるる
が、その反対の方は実に見てみよ方がない、何とも思ひか
えしがつかぬのである。そこでこの方向には唯仏の救いの
声一つを聞くの外に道はない、病気の治る方は一時は光明
のように思ひけれども、それは眞に永遠のものではない、
むしろ治らぬ暗黒面を何処々々までも見捨て給わぬ御眞実
のみが無限の光明である。

人が無事健康な時は、この暗黒面に思ひいたらないから

れるとか、なれた方面のみを見てゐると必ず行詰る時があ
る。故安波氏が生前私に形見のために

「仏の慈悲をありがたくおもえるようになったことがあ
りがたいのではない、ありがたくおもえぬ奴を相変らず
お相手下さることがありがたいことである」
と書いて下さつた。如何にもよく仏のお慈悲を簡単に云
い現わされたものである。しかして安波氏は

「この消極的慈悲が私の生命であり、力である」
と云つておられる。私は同様に仏心の顕現したことを誠
に尊く感ぜられることである。

一体世の中が吾々の思う通りになるものなら、かかる消
極的方面の救済は不必要かも知れないが、病気が快くなり
たいと希望して、快くなれなければ悲観に沈む身の上とな
つて、その下に救いの船がなかつたら実に困る。そこを御
和讃には

「弥陀・観音・大勢至大願の船に乗じてぞ

生死の海にうかみつつ有情をよほうて乗せたまふ」

とある。私の歌に

乗せられて行くや御法の船の上

世の荒波をことぞともせ

もというのがある。消極的方面を救われるのは大船に乗
せられた心持である。

そこを照らして下さる弥陀仏目の慈光を仰ぐ機会はない、
然し如何に幸福な人でも一度はこの暗黒面におどろかさる
る時節が必ず来る。

法然上人の和語灯録に

「夫れ朝に開く栄花は、夕の風に散りやすく、夕に結ぶ
命露は、朝の日に消えやすし、これを知らずして常にさ
かえんことを思ひ、これをさとらずして常に有らんこと
を思ふ。然る間、無常の風ひとたび吹いて有為(うい)
の露永く消えぬれば、これを曠野に捨て、これを遠山に
送る。骸(なきがら)は遂に苦の下に埋もれ、神(たま
しい)は独り旅の空に迷う、妻子眷族は家にあれどもと
もなわず、七珍万宝は庫にみつれども益なし、只身に隨
うものは後悔の涙なり」

とある。世の中では常に栄えんことを思い常にあらんこ
とを思ふのが吾々人間の目暮して、無常の風の来る方面は
いつも留守になつてゐる。病氣になつて治りたいが腹一杯
の処に、治してやるといふ声には迷いやすいけれども、そ
の方面で安心したのならば、たとい病氣の快くなつたのを
仏様の御利益であるとするこんでも眞の信仰ではない。そ
れだと反対に病氣が悪くなれば喜びはなくなるのが常であ
る。眞の信仰とはむしろ病氣が治らず、無常の人生に困つ
て居る私一人に向つてよびかけ給う大悲召喚の声一つに満

足の出来たことである。

繰り返して申しますが、私も実際重病に罹り、死の暗黒面に驚かされ、その全面を照らして下さる弥陀仏日の慈光に夜があけた上からお話をさせて頂いている。どうぞ皆様も仏の光明は、平生の我々の希望とは反対の方向を照らして下さることに目覚めて頂くと同時に、その御見捨てないお思召しを腹一パイ聞き取って頂きたいばかりであり、そうすれば身体にお守りをかけている必要はない、御和讃に

「五濁悪世の衆生も 選択本願信すれば

不可称不可説不可思議の功德は行者の身にみてり」とある。今生においてこのように限りのない功德が恵まれるばかりでなく、愈々出かける時、完全円満な悟りの真如法性の境涯に到達することが出来る、それを御和讃に

「煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば

すなわち穢身すてはてて法性常樂証せしむ」とある、かく生死の実際問題に徹底的解決の出来るのは

如来の御廻向に帰入せしめらるる絶対他力の信仰一つであります。

「疾病と信仰」より

生々世々の父母

俗典には三世を沙汰せぬ故に、ただ現在の父母主君の恩を報ずることばかりを申したり。経に云わく、衆生の六道に輪廻(りんね)すること車輪のごとし。或は父母となり男女となり、生々世々たがいに恩ありと云々。この故に菩提心をおこす人は、七世の父母ともかぎらず、况んや一世の父母のみと思わんや。

菩薩は一身一衆生のために善根をなさずと、されば一切衆生のために諸々の善根を修して、無上道を求むるなり。

無縁の慈悲

仏果に到りて後、本有性徳(ほんぬしようとく)の慈悲あらわれて、化度(ひとをすくう)の心をおこさざれ共、自然に衆生を度すること、月の衆水に影をうつすがごとし。然らばすなわち法を演ぶるに説、不説のへだてもなく、人を度するに益、無益の相もなし。これを真実の慈悲となづく。衆生縁、法縁の慈悲にかかわる人は、その慈悲にさえられて、無縁の慈悲を発すことあたわず。小慈は大慈のさまたげといえるはこの義なり。

以上、夢窓国師「夢中間答」

無題録

北米ロース市

大野静哲

眼

日本の念仏者、Mさんの一文の中に

「雨垂れの音に眼がさめる。夜中の三時である、ヒョッコリ起きてポロ机によって瞑想にふける。昨日は過ぎて今日になつたが……夜が明けると今日も亦弁当さげて出勤し、夕方また帰って眼る。……健康であることは嬉しい、今日も働けたことは目出度い。わが家があり、わが妻があることは有難い。……だが無常の風は今宵ふきつけるかも知れぬ。すでに七十、終点はすぐそこにある。その終点に向かって今日一日歩いてきた。秋芳洞という万年の闇の洞窟に住む鰻には眼がない。この私にも眼がないのではないか、明日は死ぬいのちであってもそれを知らない。分っている積りでも、それは概念であってそれは思えぬ……云々」と

このMさんの文はひしひしと迫ってくる、その強い反省と真剣な姿がひかっている。静哲はMさんの言々句々に共感を覚えしめられる、と同時にMさんは既に七十の老齢ながら毎日お弁当を持って働かれる健康者である人の体感の

張

文である。ここで試みに拾有六年の長い間の病氣(いび)気疾のため働けなくなっている私の日々夜々をつたない文に綴ったらどうなるであろうか。到底正確に真実に書けないで手前味噌を並べ、とるに足らぬ法味を誇張してお茶を濁すことが精一杯であろうが、拙文を誌しましょう。

「雨の音がなくても、風が窓をガタガタと吹き当てなくても、気疾という身体故障のためにすくなくとも三度か四度は口中が乾いてカサカサになって呼吸が難しくなると、必ず眼がさめる。この場合、一面なさないようにも思う、けれども逆縁ながら心の駒に自らムチをあてて、手の脂を見ながら南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称え続ける。これは御和讃に、

弥陀大悲の誓願を 深く信ぜんひとはみな

ねてもさめてもへだてなく南無阿弥陀仏を称うべし

と仰せられていることに信順して、とにもかくにも称える念仏である。最近この念仏の味がほのかながら感ぜられる

のは不思議なことである。私はまた次の御和讃も亦しみじみありがたいのである。

定散自力の称名は 果遂かすいのちかいに帰してこそ
おしえざれども自然に 真如の門に転入する

申すまでもなく私の称名は下々品の自力称名であると思っ
ている。果遂かすいのちかいい、という仏語が私には有難い、と同
時に、おしえざれども、の七字にくるとしみじみ随喜感佩
せしめられるのである。それから、自然にとは願力自然
(がんりきじねん)にということであろうと頂いて喜び且
つ感謝で胸が一杯になるのである。ある有名な和上の歌に
われ称え、われ聞くなれどこれはこれつれて行くぞの
親のよび声

と。また真信尼の歌に

世を渡る橋も渡らでわれはただ、六字のうちになたり
起きたり

と。私の慈育をうけた足利浄円和上のお歌に

蚊帳の中に如々さまと一緒に寝、一緒に起き

称えて見れば 南無阿弥陀仏

称えなくとも 南無阿弥陀仏

このお歌によって大悲の弥陀は称えるとか、称えないとか
を越えて常に我等の身を照らし、撰取して捨てたまわざる
大なるおまこと、大慈大悲の御心にてましますぞよ、と

歎 異 鈔 第 一 章

花 田 正 夫

② 弥陀の本願には老少善悪の人を選ばれず、ただ信心を
要とすとするべし、その故は罪惡深重、煩惱熾盛の衆生
をたすけんがための願にてまします。

本願のめあて

罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願、この
一句がこの章のかなめである。罪深く、悪重く、心を煩わ
し、身を悩ます、いかりはらだち、そねみねたむころの
燃えさかかって、われとわが身の始末のつけようのない者、
その身を浄土に迎え、成仏せしめずばおかしとの願が、仏
の根本の願いであると告げられる。

さてこの仰せを聞いても、如何にも仏としてはそうであ
らう、有難い本願である、世の中にはひどい人間も多いか
ら大変なことであろう、と他人事ひとことに聞き流すのは、自分の
本當の姿が知れていないからである。

池山先生が或時道成寺鱗(うろこ)が肌の脱ぎしまい、と

の恩師の慈教は今日も新たに、お浄土よりこの胸に響きわた
りたまうてあることが不思議きわまる嬉しさである。

右のお歌はかって重病の床にあられる桑野淨城法師へ浄
円和上がお寄せになったものであることから拝察すると、
この愚鈍無智な身でかれこれ申すのは恐縮であるが、撰取
心光常に照護したまう、を和上がお喜びのままにお歌にせ
られたものかと思われてくるのである。和上の慈祖父、足
利義山老師が撰取心光常照護のころを御詠に
すてじてうかたきちかいの御光りにおさめとられし身
こそやすけれ
とある。

……今日もまた諸仏の護念証誠が悲願成就のゆえにこの
身にふりむけられて、弥陀の之恩を憶念し、かつまたあら
たに恩師のお歌をてがかりとして、浄土にいます浄円和上
にお遣い出来たという喜びは到底拙い筆では表現出来ない
が、私には大変ありがたいのである。南無阿弥陀仏、合掌
一九六八年四月二十五日、浄円師憶念の日。九拜。

○ 足利浄円師詠
頂上を忘れてのぼる不二の山

いう川柳があるが、安珍あんじんを追う清姫きよひめが蛇身へびみとなって火を吹
いたことの諷刺である。然し自分の心にも鱗うろこの生えている
ことが見えない人には歎異鈔はわからぬ」と云われたこと
がおもいあわされる。

これに反しておのれとつくる罪業の重さに沈みきって、
空しくあえぐ者にとっては、他力の悲願はかくの如き我等
がためと知らされて、またとない救いの光がそこに仰がれ
る。かって鈴弁を殺して行李詰死体を池にすて、それが発
覚して死刑になった山田憲が、「自分は天下の大罪人で懺
悔など口に出るぬ身であるが、如来は極重悪人を救うと誓
って下さる。歎異鈔一章はそれを教えて下さった、この一
章で満足である、誠に感謝にたえぬ」と念仏裡に述べてい
る。

わが身の浅間しさが知れても、本願の真実を聞かぬ時は
はてしない苦惱と流転が定めてあり、本願のみ救えを聞い

でも、自分の凡夫としての素地(きじ)に気づかぬ時には空しい声とかひびかぬ。

ここに一番肝腎なことは、本願のいわれを聞きひらくひとつであるが、真に道を求めた人の多くが遭遇する難関は聞いて聞えず、遭うてあえぬという歎きである。こうした我々に蓮如上人は、

「時節到来ということ、用心をも、其上に事の出来候を時節到来とはいわぬべし。無用心にして出来候を、時節到来とはいわぬことなり。聴聞を心がけての上の宿善無宿善ともいふ事なり。ただ信心は聞くにきわまる事なる由、仰せの由に候」

と聴聞の大事をすすめ、また、

「至りて堅きは石なり、至りて柔かなるは水なり。水よ、く石を穿つ。心源(しんげん)もし徹しなば、菩提の覚道(かくどう)何事か成ぜざらん、といえる古き詞(ことば)あり。いかに不信なりとも、聴聞を心に入れ申さば、御慈悲にて候間、信を得べきなり。仏法は聴聞にきわまることなりと云々」

ともいましめられている。
それというのも、刀は刀自身を切ることが出来ず、鏡は鏡自身を写し得ぬように、自分で自分を知ることが不可能である。自分のことだから自分が一番よく知っているように

と自然にびったりと信証される。しかもその信の光によって我身の石ころ同然の身を省みる時、この仏のみこところはねかえしはねかえしするより外に能(の)のない、邪見と我執の身を、呆れず捨てずくりかえしまきかえし倦むことなく注がれる大悲の無窮さに、謝すべき言葉もない。

「こころもよことばも遠くおよばねば

はしなく御名をとなえこそすれ (良寛師)

老少善悪の人を選ばれず

この一句は、私自身が伯父にすすめられて本鈔をはじめて読み、他に聞くことの出来ない広大無辺な仏の心にふれ今日もなおいよいよ深い感銘をうけ続けている。

その前に私はキリストの愛の教を学んで如何にも自分も冷酷であることを知らされ、一灯園の真似事をして如何にも自分の空虚なことを教えられて、われと我身をもてあまして、宿無し犬が芥溜をあさり歩くようにさまよっていた時に、この聖人のお言葉をきいたのである。自分のような者には何処にも救いはない、一切から捨てられて当然であると、われとわが心を堅く閉ざしていた時、「愚かさも悪しさも心配するな、へだてはせぬぞ!」との不思議な声をきいたのである。私は思わず、自分を迎えて下さる家があることあると、迷い児が親を見出したと同様な喜びにふれた

く聞くが、身びいきな心が邪魔をして正しい自分は知らない出来ぬ。或る作家が一家揃ってテープで録音し、それを聞いた時、みんなが、自分はこんな声じゃないと、頭を傾けたと云うのも、そのよい例である。

ここに自分を知るに大切な道は、よい教を聞くことである。凸凹のない曇りのない鏡の前に立つと自分の顔が正しくうつる。仏の智慧を大円明鏡と讃えるのも、煩惱の曇りがなく無我な徳から正しくものを映して下さるからである。その仏の智慧から出た教えの中に自分の本當の姿がある。

源信僧都も法然上人も、観無量寿経の下品(げほん)の機八仏に救はれる凡夫を分けて、大乘の教を奉ずる凡夫を上品、小乗の教や世間善をまもる凡夫を中品、濁世に生れて煩惱の動くままにあらゆる悪を重ねて真実の善は微塵もない凡夫を下品というVの救いを説かれているところに御自身を見出されて「この下品、もつとも要なり。すこぶる我等が分に相当せり」と特筆して、本願をひとすじに仰いでいられる。

親鸞聖人は、涅槃経を精読されて、大逆の王阿闍世こそ我身、と信知していられる。

こうしたよき人を師として、よく読みよく聞いて、仏のかねてしろしめす我が姿が照らし出される時、罪悪深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願は、我身一人のため

更に後になって聖人が指示される涅槃経を読むと、大逆の罪に気づいて大煩悶におちた阿闍世が、耆婆大臣の勧めと父王の声に導かれて釈尊の前に出た時、「大王よ」と呼びかけられたが、大悪の身を仏が王と呼ばれる筈はないと左右を顧みた。仏は再び「阿闍世大王よ」と呼びかけられた、これを聞いた阿闍世は驚喜して「仏心平等にしてさらにへだてなきを知る、この喜びは天界のたのしみなどくらべものにならない……」と述懐している。このところを読んで、更に感懐の深いものがある。

經典に「慈眼もて衆生をみそなわし、平等にして一子の如し」ともあるが、相對差別の世界の何処にかかる広大なまことがあろうか。先進国と誇る米国において人種差別の問題は随時随所の紛争となつてはいるが、省みて日本国内においても差別問題は率として抜くあたわぬものがある。否更に身辺に老少の対立があり、労資の紛争が続き、人の子のあるところ、へだてとさばきの寒風が吹きすすんでいてそのまんまが私自身の内心の実際となつてはいる。良寛師は如何なるが苦しきことと問うならば

人をへだつる心とたえよ

と歎いている。かかるはてしない苦海に大灯炬となり大船筏と現れて下さるのがこのおへだてなき仏心である。

ただ信心を要とす

聖人は疑惑和讃を二十三首作られて、疑心を誡めておられるが、仏の願力一つで光明の彼岸に導かれて行く真宗では、その願力を信ずるか、疑うかが、我が身の浮沈のかかるところである。ある篤信の師が「乗せて渡して下さる本願の船であれば、自分の足の強弱には用事がない」と語られた。何処までも信する一つがかなめであると知らされる。さてこれについて、近角先生の歎異鈔講義に、薩摩からわざわざ東京まで求めて来た尸師が「弥陀の本願には老少善悪の人を選ばれず、その故は罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にたまはす、とだけあれば誠に有難いのですが、その間に、ただ信心を要とすとすべし、とあるので困ります。まことに構着な心ですがあれが無いとよいのですが……」との質問をされた。そこでお答えになったことは「信仰の問題は如来が衆生をこのように救うて下さるというように客観的に眺めていくことではない。如来が現に、老少善悪のへだてなしに、罪悪深重、煩惱熾盛の我身をたすけて下さるその思召しを聞かせて頂く時、その活きた御真実をわが身にうけるそのことが信心である」△大意の略述▽と。先生のこのお答は、我等の空しいはからいを払って下さる親切至極のお言葉と心に刻まれている。

○ ○

した願いが満たされるはずが無い。聞いても聞いても同じところのどうどうめぐりであった。その時、近角先生の教をよく聞いていた人から「それは善煩惱にだまされているのだ」と指摘されて、自分の求道の間違いに気づき、風夜に債務者にせめられていたようなこれではいかぬこれではいかぬという焦りの生活から解放された。これは善を欲しがった人の例である。

私自身は小学校の頃から悪童の部に属して、模範生とは程遠い奴である。したがって悪が苦になる傾向が強くいつも卑下慢におちて苦悶することが多い。この私に「悪をもおさるべからず弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故に」との仰せは、私一人の上にこの上もなく有難い教である。

思うに、悪をおそれるのは、何時かは悪がやめられるはずだと、心の底に予想しているが、何時も何時もその予想が崩れる、そこに、困った困ったと長歎息が続く。今しばらくこのような自分をそのままおいて、善導大師の告白を聞こう。

「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あること無し」

と。現在も、遠い昔からも、これからさきも、浮ぶ瀬のない身と述べていられる。この金句によって省みるのに、

③しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず念仏にまさるべき善なき故に、悪をもおさるべからず弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故にと、云々。

絶対善の念仏

善がほしいのは悪がおそろしいからであり、悪がおそろしいのは善が思うように出来ないからである。つまり同じ事柄の裏表である。

然し実際の生活では、ほしくても得られない善に身を焦がす傾向の人と、自分の浅間しさに悶え苦しむ傾向の人があるのでこのように表も裏も知り尽くされての周到なお言葉が述べられたといただいてみる。

私の知人の某弁護士は、人生問題に苦しんで弁護士に相談せねばならぬのはよくよくのことである。自分はそこへ身を投じて出来るだけ親切に相談にのろうと決心して弁護士となったが、さてその世界も「ここもまた浮世なりけり」で理想の幻影はゆらぐばかりであった。それでも自分だけは理想の弁護士でありたいと願い専心努力はしたが、仲間からは独善者とへだてられ、相談に来る人もあまり無いという有様となり、せめて信心を獲たらここを立派にやりのけ得るであろうと、聞法を続けた。そのこと自体が仏法を利用してうまくやろうとする功利心であるから、そう

自分は悪い、困ったと言っているのは、世間道徳上からは如何にも謙遜のようであるが、善導大師の仰せとは全く異っている。即ち、何時かは悪がやめられて立派になれるだろうという未来は善人になれるという慢心がある。卑近な例で云えば、現在貧しくても昔は立派であったと過去を誇る人と、昔は貧しくても今盛大にしている人は、昔はどうでも今さえよければよいと現在をたのむ人と、今も昔もふしあわせでも、五年か十年すれば子供が成人してきつとよくなれると未来に望みをかける人がある。憍慢の人は過去・現在にほこるものを持つが、卑下慢の人は未来の善人の幻影にだまされているのである。我々は虚仮の善にだまされ易いものである。

さてこの善導大師の仰せによって、過去も現在も未来もたすかるよすがの絶えて無い者と知らされる時「悪をもおさるべからず、本願をさまたぐるほどの悪なきが故に」の仰せは、まことにたのもしく、力強い限りである。近角先生は、「どんな大きな氷碓も太隅を冷やすことは出来ないかえって太陽の力で氷はとがされてしまう」と述べられ、この絶対善の本願念仏のひかりに照らされると「今迄自分を金剛石のように立派なものと思っていたのがガラスの偽せ玉と知らされ、悪を怖れて猛虎のようにおののいていたのが、実は張子の虎であったと知らされる」と、相対虚仮

扱

の世界をたくみに説かれている。

無明長夜の灯炬なり智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり罪障おもしとなげかざれ
願力無窮にましませば罪業深重もおもからず
仏智無辺にましませば散乱放逸もすてられず

正像未和讃

無得光の利益より威徳広大の信をえて
かならず煩惱のこおりとけすなわち苦境の水となる。
罪障功徳の体となるこおりとみずのごとくにて
こおりおおきにみずおおしさわりおおきに徳おおし

曇鸞大師和讃

聖人はここにおいて、教行信証の総序の文に

「しかれば、凡小（ほんしよう）修し易き真教（しんきよ
う）、愚鈍（ぐどん）往き易き捷徑（ししようけい）なり。大聖（だいせい）二
代の教この徳海にしくはなし。

穢（え）を捨て浄（じよう）をねがい、行に迷い信に惑
い、心くらくさとりすくなく、悪重く障り多きもの、特に
如來の發遣を仰ぎ必ず、最勝の直道に帰して、専らこの行
につかえ、ただこの信をあがめよ！」

と、特に、必ず、専ら、ただ、と、悪重く障り多く、迷い
惑う我等に喚びかけて下さる悲心、ただ感涙にむせぶばか
りである。

あ と が き



御紹介

歎異抄感銘錄 福島政雄先生著

定価五百円、送料七十円、
東京都新宿区早稲田町四二、明玄書房
振替口座、東京一四七五八三。

十六年前、歎異抄身語記として出版され
ましたが、其の後絶版になってしまったもの
を、今度新しく校訂されて出版された
ものであります。この書は単なる歎異抄
の解説書ではなくて、先生が身をもって
全生活の上に本抄の深い心を読んで下さ
った感銘録であります。

五月七日東京の亀野治さんの見舞をうけ
た。入院準備中のこととて忽卒の間の談合
であったが終戦以来二十年目で心あたたま
るものであった。六月五日、退院して程な
い日、通産省の岡野多喜夫さんが亀野さん
から聞いたという見舞って下さる。三十
六年振りである。お二人とも京都の学生時

提

田原のお園さんの逸話

愛知県の渥美半島の田原という町はあまり法義がさかん
でなかった。そこで田原のお園さんに

「田原は法義のうすいところときくが、淋しいだろう」
と或同行が聞くと

「田原はどうか知らぬが、わたしの胸の中では煩惱があ
れ狂うので、仏様は大繁昌、大繁昌」と即答した。

お園さんが隣村の夜の法座にお参りしての帰り、人影も
ない山道に一人でさしかかった時、フト前方に大きな山犬
の鋭い目が草むらにひかかっていて、今にも襲いかかろうと
していた。さすがのお園さんもびっくりして、もう逃げよ
うはないと観念して、合掌して念仏していると、山犬が飛
びかからぬばかりでなく、キラキラひかる山犬の目も消え
ていた。とんでわが家に帰ったお園さんは、御内仏の扉を
ひらき御礼申すには

「山犬でさえ相手にしてくれませぬこの姿を、あなた様
ばかりはなあー南無阿弥陀仏々々々々」
とくりかえして涙していたとのこと。

(以上伝聞記)

代、聖書寮で同じ屋根の下で、同じ鍋の飯
を頭け合った間柄である。かつては紅顔の
青年も、春風秋雨幾星霜、幾山河を越えて
年輪は自然の落着きとなって、夫々の風格
がうかがわれた。

談論風発のうちに岡野さんと最近亡くな
った大石順教尼について語る。両手を斬り
おとされながら、旅先でカナリヤがくち
ばし一つで雛を養っている姿に驚異して口
は筆をくわえ、針をも使って立ち、身障者
の母として八十年の生涯を閉じた人である

五月号に順教尼のことばを一寸紹介しまし
たが、岡野さんは新聞で詳しく読み感動し
たとのことで、早速記事を送って下さる。
その中に

「自分はしあわせなことに、どなたもお
持ち合せがない大きな財産が三つござい
ます。

その一つは学校へ行かれなかったことで
す。学校へ行きませなんだから、芸道の
上で、人様の仰言することを素直に聞ける
ということなんです。

次に、両方の手が無いことです。それで
小鳥から口で字を書くことを教えられた
んです。
第三は貧乏。それでどんな人ともひとつ
になれる「無財」という宝をもっており
ます」

と、幸せを生んだ「三無」の財産を淡々と
して述べてあった。それにつけて、良寛さ
んの歌に

おろかなる身こそなかなかうれしけれ弥
陀の誓にあうとおもえは
とあるのを思いあわせました。又釈尊在世
の時代の周利判得の愚直さがそのまま転せ
られて純真な仏法者となつてゐること等々
無い者が、持てる者をうらやみ憎む前に、無
を財宝として転ずる道を見出したいもので
あります。

御心配いたしております私の病状も順
調に快気しております故、何卒御放念下さ
いませ。主治医の許可のあり次第法縁もは
じめさせて頂けると思っています。

定価 半年 二百五十円(送共)
一年 五百円(送共)
名古屋市南区駄上町三ノ八八
編集・発行人 花田 正夫
電話八二二局七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 人 吉野 穂志郎
名古屋市南区駄上町二ノ八八
発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

昭和
光二十
卷第
七
昭和
四十三
年七月
十五日
發行
三
種
郵
便
物
認
可
（
海
月
二
回
十
五
日
發
行
）